

ストーンヘンジの倒壊事件

1900年の大晦日に発生した石材倒壊事件は、ストーンヘンジの歴史にとって大きな節目となった。遺跡損壊のニュースを知った多くの人々が、現地を見ようと、遺跡に押し寄せ、領主のアントロプス卿は、敷地の周囲にフェンスを巡らし、料金を徴収し始めたのだ。一方、近代考古学の父とも言われるフリンダース・ペトリ卿がタイムズ紙に遺跡の復旧を訴える手紙を書き、それまで遺跡の保護に関する政府からの申し出を拒み続けていた領主も、ついに修復作業を行うことに同意する。その作業の監督としてロンドンの古代学協会が推薦したのが、16年にわたる日本での滞在を終えて、1888年に英国に帰国していた鉱業・冶金学技師のウィリアム・ゴーランドだった。

ゴーランドは、1842年に英国で生まれ、王立化学専門学校、王立鉱山学校で、鉱業・冶金学を学び、3年間、ブロードン銅会社で冶金技師を務めたあと、1872年(明治5年)、明治政府の招聘により、いわゆるお雇い外国人として来日した。貨幣制度の統一と貨幣の改鑄に迫られていた明治新政府にとって、純西洋式の貨幣鑄造工場の設置は急務だったが、そのため新しく設置された大阪造幣寮(現在の造幣局)で、「化学冶金方兼造幣長官顧問」として指導に当たることになったのだ。ゴーランドは、1878年(明治11年)には、試験方、溶解所長となり、銅の精錬のためにイギリス式反射炉を建設したが、その技術が陸軍の大阪製造所(のちの大阪砲兵工廠)に伝えられ、その後の兵器製造に大きな役割を果たすといったように、明治期の日本における技術・産業の近代化に多大な貢献をした人物だった。日本アルプスの命名者としても知られるゴーランドは、帰国時には、滞在中の多大な功績に対して、日本政府から勲三等に叙せられ旭日章が贈られている。英国に戻ったあとは、ブロードン銅会社に冶金技術主任として復帰し、王立鉱山学校で冶金学の教授を務めている。

ストーンヘンジの修復と発掘調査

鉱業・冶金学の専門家だったゴーランドが、ストーンヘンジの修復作業を任されることになったのは、特別な理由がある。帰国して9年後の1897年、ゴーランドは、ロンドンの古物学協会(Society of Antiquaries)で、「日本のドルメンと埋葬墳」(The Dolmens and Burial Mounds in Japan)と題した論文を報告し、同年、『アーケオロジア』に掲載している。ドルメンとは、一般には、巨石記念物の一種で支石墓と訳され、新石器時代から初期鉄器時代にかけて世界各地で見られるものだが、ゴーランドが言う日本の「ドルメン」とは、現在の用語で言えば、古墳時代の横穴式石室にあたる。日本滞在中に研究し、調査した「ドルメン」の概要をまとめた上記の論文によれば、ゴーランドは、全国の406基を入念に調査し、140基については略図を書いたり、計ったりした。本文74頁、写真・凸版の挿図が43図添えられた同論文では、日本における当時の考古学界の水準をはるかに超えた科学的な調査方法に基づいて、「ドルメン」(石室)や古墳が研究され、精緻な議論が展開されている。ロンドンの古物学協会のメンバーたちは、講演や論文を通して、日本におけるゴーランドの考古学的な業績を詳しく知っていて、その方面での知識や経験をストーンヘンジの修復作業と発掘調査

に応用できると判断したのだろう。

1901年、ゴーランドが携わって行われたストーンヘンジの修復作業では、大きな石材が梃子を利用して持ち上げられ、立石の根元付近の発掘調査が行わ

れた。『アーケオロジア』に掲載された発掘報告によると、長方形の木枠を用いて地面を区画し、遺物の出土位置や高さを細かく記録しながら、慎重に掘り下げてゆく方法が取られたが、これは、ゴーランドが大阪府の芝山古墳の発掘調査で行った方法を改良したものだ。発掘調査では、立石を磨くための砥石や各種の石器が発見され、石材加工が現地で行われたことも判明した。また、石の表面に銅鏽が付着していたことから、ストーンヘンジの構築年代は石器時代の終末から青銅器時代の初頭(紀元前1800年頃)だと推定された。

英日にまたがるゴーランドの足跡

ゴーランドは、その後も、シルチェスターのローマ時代銀精錬遺構など、専門の冶金学の知識を生かした学際的な考古学研究を晩年に至るまで継続する。1922年(大正11年)、80歳で没したゴーランドの訃報はすぐに日本に届けられ、英国でペトリに学んで日本に近代考古学を導入した浜田耕作博士は、大阪朝日新聞に、「日本考古学の恩人ゴーランド氏」と題した追悼文を寄稿している。日本の石器時代の研究をアメリカのモースがその端を開いたのと同様に、古墳の科学的研究はゴーランドの手で始められたといっても過言ではないと、浜田は、故人の業績と貢献を讃えた。

ただ、同時代の日本考古学に大きな影響を与えたモースの場合と違うのは、ゴーランドの古墳調査が、本務の余暇を利用して、ほとんど単独で行われ、その調査成果が公刊されるまで、多くの歳月を要したことだ。しかも、ゴーランドの帰国後、十数年を経てロンドンで刊行された英語の論文は、ごく限られた学者の目に触れただけで、同時代の人々に直接の大きな影響を与えることがなかった。

日本におけるゴーランドの古墳調査の成果が広く知られるようになるのは、後年になってからだが、近年、その重要性があらためて認識され、ゴーランドの研究成果を再検討し、大英博物館に寄贈されたゴーランドの膨大なコレクションを再調査し、その全容を明らかにする日英共同の研究プロジェクトが、大英博物館、セインズベリー日本藝術文化研究所、そして、日本の多くの研究者の協力のもと、2011年から進められている。2016年3月19日、大英博物館で開催されたプロジェクトの報告会では、ゴーランドに関する博士論文を作成中のルーク・エディントン・ブラウン氏(イースト・アングリア大学)をはじめとする研究者たちの発表を通して、日英双方における黎明期の考古学に大きな足跡を残したゴーランドの業績とその意義をあらためて教わることができた。

参考文献

W. ゴーランド著、上田宏範校注・稲本忠雄訳『日本古墳文化論』、1981年



ゴーランド・プロジェクトの報告会
(大英博物館にて、筆者撮影)